

アジアに生きる文化と鉄

未来を創る鉄 文化を育む鉄

数々の超高層ビルや大規模な高速鉄道の建設等が
かつてない勢いで進められている。

最近のアジアは、建設の槌音の絶えることがない。

今、アジアが世界で最も熱い。

たくましく、豊かな生活を生み出すエネルギーに溢れ、
長い歴史に育まれた多彩な文化を持つ。

アジアの人々は、豊かな未来を創造している。

上海・浦東

変貌を遂げる上海・浦東

アジア諸国の中で近年目覚ましい経済成長を遂げているのが、中国である。なかでも上海市を中心とする地域は、世界でも類をみない速度で発展を続けている。

中国黄浦江の東に位置する上海市の浦東地区には、二つの球体を串刺しにしたような形のテレビ塔（東方明珠）や、中国最高層のビル（金茂大厦）等の超高層ビル群が林立し、見る者を圧倒させる都市が広がっている。現在、この地区のいたるところで超高層ビルが建設されているが、その速度は地図の製作が追いつかないほどである。2001年10月には上海APEC (Asia-Pacific Economic Cooperation Conference, アジア太平洋経済協力会議) が浦東で開催され、変貌した上海の姿が世界に知られることとなった。

中国銀行上海ビルは、下層部が正方形で上層部が楕円形になっており、中国古代の宇宙観「天円地方」（円なる天と方なる地）を表している

驚くことに、浦東の景観がこのように変貌したのは、1990年代に入ってからであり、10年にも満たない間でのことである。20年前の浦東は、農村であった。1988年になると、上海市は停滞する経済を危惧し浦東開発を計画した。この開発計画は、1990年に国家プロジェクトに格上げされ、対外開放政策として推進された。1995年に地下鉄が開通し、1999年には内環状高架道路と浦東国際空港が完成し、瞬間に都市基盤が整備さ



話題の鉄道二大プロジェクト

現在、中国と台湾の大規模な高速鉄道計画が注目されている。

中国では、北京—上海間1,300kmを結ぶ北京上海高速鉄道が計画されている。中国初となる高速鉄道は、走行速度が250～300 km/hであり、北京—上海間を約4時間半で運行することになっている。このような大規模な鉄道計画に対し、現在フランス、ドイツおよび日本を中心とした受注競争が繰広げられている。これに先がけて、浦東国際空港と市内を結ぶリニアモーターカーの建設が進行している。これが完成すると、バスで1時間半を要する空港—市内間の33kmが、約7分の道程となる。

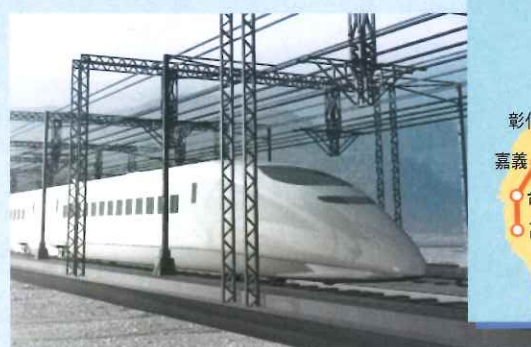
台湾では、台北—高雄間^{ひびしゅん}340kmを結ぶ台湾高速鉄道の工事が進行している。2005年に開業予定のこの高速鉄道は、最高速度が300km/hであり、台北—高雄間を約1時間半で運行する。

台湾高速鉄道では、車両システムに日本の新幹線「700系のぞみ」が採用され、また軌道敷設工事の南半分にあたる約176kmを日本企業連合が担当することになっている。

これら二つの鉄道計画が現在注目されているのは、欧州勢と日本の受注競争ばかりでなく、リニアモーターカー等の世界最先端技術がアジアで実現化しようとしているところにある。



2003年には世界初の超高速実用リニアモーターカーが浦東国際空港と市内を結ぶ予定である
(トランスラビッドインターナショナルホームページより転載)



2005年完成予定の台湾高速鉄道
(車体の色は未定。写真提供:台湾高铁)



れることとなった。国際貿易都市としての環境が整えられた浦東は、1993年に始まった対外貿易における約25億ドルの輸出入額が2001年には約300億ドルに増加し、8年間で10倍以上の経済成長を遂げた。

世界でも類を見ない浦東の開発計画には、日本企業も大きく関わっている。テレビ塔手前に位置する中国銀行上海ビルは、国際金融の主導的役割を担う建物として計画された。このビルの設計および施工は日本企業が担当し、建築用の鉄骨(約9,500t)は日本製のものが使用された。主要資材を積極的に国際調達することによって高い品質と適正な工費を両立させることが可能になったという。

浦東は、通常30年にかかる都市開発計画をたった10年で実現させている。このような驚くべき躍進は、浦東だけにとどまらず中国の他地域やアジア諸国にも派生していく可能性がある。上海・浦東の変貌は、アジアの次の発展を予感させるに十分である。

生活に根ざした鉄器文化

鉄鋼材料は、産業や経済の発展に必要な不可欠な工業材料である。その一方で、伝統や風習とともに生活に密接した鉄器として、古くからアジアのいたるところで使用されてきたのも鉄鋼材料である。

国立歴史民族博物館教授朝岡康二氏によると、東南アジアの島々には、比較的早くから鉄器文化が芽生え独自の発達を遂げてきたと言う。このような文化における鉄器の代表的な用途は、儀礼用具と農具である。

インドネシアのジャワでは、「クリス」と呼ばれる鉄製の剣を儀礼用具に用いている。「クリス」は、マジャパイト王朝時代(1292～1528年)から王の守り剣として使用されていたといわれる。身体に鉄を帯びることによって邪気を払ったり力を持つと考えられ、神秘主義と深く結びついている。また、身につける「クリス」は地域ごとに



ジャワの「クリス」は今日でも儀礼に使用される

鎌などの農具がずらりと並んだインドネシア・ブレベスの町の露店



形状が異なり、民族性の象徴としても捉えられている。今日では、結婚式で花婿が必ず携帯する所持品となっている。

一方、韓国の南部では、馬草切り(「ジャクドゥ」)の刃の留め金具(「コドゥセ」)をお守りにする風習がある。この地域では牛を多く飼うので、馬草を育て「ジャクドゥ」で刈り取ることが日常的に行われていた。その「ジャクドゥ」の刃を接合させる鉄製の「コドゥセ」は、結合を意味し、鍛冶屋で輪状に加工し安産祈願として母親が嫁ぐ娘に持たせるのが習慣である。最近では、「ジャクドゥ」を使うことも少なくなり、鍛冶屋で「コドゥセ」だけを買って求めお守りとして渡すことが多い。

農具用鉄器の一例は、インドネシアの「アニアニ」である。「アニアニ」は、木片に鉄刃を付けた手の平に収まる小さな農具である。インドネシアでは、この「アニアニ」を用いて、稲の穂先だけ摘む伝統的な稲刈り法が行われてきた。最近では、鎌が用いられるようになり、「アニアニ」による伝統的な稲刈り風景はほとんど見られなくなっている。



伝統的な稲刈り農具
「アニアニ」

鍬、鋤、鎌等の鉄製農具の刃が欠けたり壊れたりすると、地域社会や集落に関わる鍛冶屋が修理することになる。鍛冶屋と村人の関係は地域により様々であるが、村の代表者が村人全員の農

具を預かり市場の鍛冶屋に出向く場合や、村に居住する鍛冶屋が農具一式を管理し貸し出すところもある。朝岡康二氏は、『地域の地質、地形、農法に最も適した鉄製農具が作られ、修復や加工を繰り返しながら農具を仲立ちとした人間関係が成立している。それは、修復可能な鉄の特性が古くから人々に理解され生活に溶け込み生まれた文化である』と語っている。

日常生活において重要な役割を担う鉄器は、特別な意味が込められ儀礼の用具となった。また、生業を支える農具は、鍛冶屋と人々の関係を築いてきた。鉄は、アジアの生活文化の中で経済的な豊かさだけでなく、人々の思想や絆をより豊かに育む役割を果たしている。



鍛冶技術が発達したインドネシア・チサトの金物問屋



韓国の古物回収屋はハサミをチョキチョキと音を鳴らし、古鉄を回収に来たことを知らせた。かつてこのハサミは古鉄と交換する鉛を切断するために使われていた

韓国の金属食器

アジアには奥深い食文化がある。豊かな食材に恵まれた国々は、独自の調理法や食事法を持ち、様々な食器を使用している。

日本とは異なり、韓国の食器はステンレス鋼製が主流である。かつての李朝時代(1392~1910年)には、白銅製や真鍮製の食器が多く使われていたが、中国製の高価な青磁器が入手しにくかったことなどから代替品として金属食器を用いるようになったという。宮廷では、毒が入ると変色する銀製食器が毒見役として重宝されていた。やがて一般家庭でも金属食器が使用されるようになるが、真鍮製食器は手入れが難しいため、耐食性に優れたステンレス鋼製食器が広く普及するようになった。

金属食器は、「一生もの」という意味があり、大切に使い続ける習慣がある。娘が嫁ぐときは、一生添い遂げるという想いを込め、金属のスジョ(匙と箸)を持たせるのが習慣である。韓国の人々は、このスジョを使い食事を摂る。スジョは、どんな家庭でも家族の人数分が揃



韓国ではスジョ(匙と箸)を、スジョ入れに入れて大切に保管する

えられ、きれいな刺繍が施されたスジョ入れに入れて丁寧に保管される。人々の思い入れの強い金属食器は、貴重なものとして大切に扱われている。

近い距離にありながら、食器に対する韓国の人々の想いは日本とはかなり異なる。そこには、光輝く金属食器の魅力を生活のなかで発見し、伝承してきた、韓国の人々と金属との深い結びつきがある。

